

特別活動における「クラブ活動」の指導の実態 —学校規模に着目して—

Actual Situation of Teaching “Club Activities” in Special Activities: Focusing on School Size

宇田 響*

Hibiki UDA

Abstract

Based on data obtained from a survey of elementary school teachers, this study examines the actual situation of club activity instruction from the perspective of school size. The five main findings are as follows: First, it transpired that larger schools, compared to others, were less able to implement club activities in terms of the characteristics of “children thinking and planning together” and “cooperating with children of different grades.” Second, it was found that smaller schools had not introduced a system for children to propose the establishment of new clubs or observe more specific club activities, compared to other school sizes. Third, in terms of the implementation of club activities, it was found that the larger the school size, the less the children were able to plan the annual activities on their own, and the less time they had to decide on the specifics of each activity on their own. Fourth, smaller schools did not provide students with adequate opportunities to present the results of their club activities. Fifth, in terms of the divergence of learning processes, it was found that small and large schools have a higher degree of divergence from the learning process currently being conducted at their schools than medium-sized schools, compared to the learning process exemplified by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology.

1. 問題の所在

『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編』（文部科学省 2018）において、クラブ活動は、学級活動、児童会活動、学校行事とともに特別活動を構成する「内容」として位置づけられている。また、他の内容と同様に、特別活動の全体目標で掲げられている資質・能力の育成が目指されている。全体目標で掲げられている資質・能力とは、「多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする」「集団や自己の生活、人間関係の課題を見いだし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする」「自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う」（文部科学省 2018、11 頁）といったものである。クラブ活動では、「異学年の児童同士で協力し、共通の興味・関心を追求する集団活動の計画を立てて運営することに自主的、実践的に取り組むことを通して、個性の伸長を図りながら」（文部科学省 2018、102 頁）、上記の資質・能力の育成を目指すこととされている。

クラブ活動は、全体目標で掲げられている資質・能力を育成する上で重要な内容として位置づいている。にもかかわらず、クラブの特質（児童が好きなことや興味のあることを念頭に計画を立て、異学年の児童とも協力し楽しみながら行うという特質）をふまえて実施されているのか、活動に取り組んだ成果を発表する機会は設けられているのかなどの基本的な実態すら、十分に検討がなされてこなかった¹⁾。そうした状況をふまえて、宇田・実森（2024）では、クラブ活動の指導を担当している小学校教諭（指導教諭・講師を含む）を対象としたアンケート調査の結果をもとに、多くの小学校ではクラブの特質をふまえた活動が実施されているが、児童が計画を立てて活動を行うという点において

* くらしき作陽大学子ども教育学部、助教（Kurashiki Sakuyo University, Faculty of Childhood Education, Assistant Professor）

改善の余地があること、また、活動に取り組んだ成果を発表する機会を設けていない学校が比較的多いことなどを明らかにした。こうした知見は、今後のクラブ活動の指導のあり方を考えていく上で基礎的な知見となり得るものである。

しかしながら、宇田・実森（2024）は、学校を一様に捉えた分析によって得られた知見を提示しているという点に問題がある。というのも、クラブ活動の指導の実態は小規模校、中規模校、大規模校といった「学校規模」によって変わり得ると考えられるからである。クラブ活動の指導のあり方を、学校現場の実態を可能な限りふまえて考えていくためにも、学校規模に着目した分析は必要だろう。

そこで本稿では、小学校教員を対象として実施したアンケート調査をもとに、クラブ活動の指導の実態を学校規模という視点から検討を行う。その上で、今後のクラブ活動の指導のあり方を考察することとしたい。

2. 研究の方法

使用するデータは、オンライン調査サービス Freeasy に登録しているモニターを対象に行ったアンケート調査で得られたものである。2023 年 8 月下旬に、小学校教員を抽出することを目的としたスクリーニング調査を行った上で、小学校教諭（指導教諭・講師を含む）を対象とした主調査（小学校のクラブ活動の実態に関する調査）を行った。有効回答票数は、小学校教諭（指導教諭・講師を含む）230 名であり、回答票数に占める有効回答票数の割合は 93.9%となっている。詳細は宇田・実森（2024）を参照されたい。

上記の調査では、本稿の分析で着目する「学校規模」に関するデータを収集することができていない。そのため、2023 年 12 月下旬から 2024 年 1 月中旬にかけて、上記の調査で有効回答とみなした小学校教諭（指導教諭・講師を含む）230 名のうち、当該年度クラブ活動の指導を担当している 186 名を対象に、追加のアンケート調査を行った。有効回答票数は、小学校教諭（指導教諭・講師を含む）147 名であり、回答票数に占める有効回答票数の割合は 96.1%となっている（詳細は表 1 を参照）。

表 1 追加のアンケート調査の概要と対象者の属性

有効回答票数	回答票数	割合（有効回答票数／回答票数）
147名	153名	96.1%
性別		
男性（割合）	女性（割合）	
68名（46.3%）	79名（53.7%）	
年齢		
20代（割合）	30代（割合）	40代（割合）
20名（13.6%）	44名（29.9%）	37名（25.2%）
50代（割合）	60代（割合）	
32名（21.8%）	14名（9.5%）	

注：括弧内の%は、有効回答票数の内、性別／年齢についての回答があった者に占める割合。

以降では、学校規模に着目し分析を進めていく。追加のアンケート調査では、勤務先の学級数（全学年の計）についてのデータを収集しているため、このデータをもとに学校を規模別に分類した²⁾。分類の際に参考にしたのは、学校教育法施行規則（昭和 22 年文部省第 11 号）である。学級数の標準について示した第 41 条には、「小学校の学級数は、12 学級以上 18 学級以下を標準とする。」という記載がある。この記載をもとに、12 学級以上 18 学級以下を便宜上「中規模校」とし、11 学級以下を「小規模校」、19 学級以上を「大規模校」と分類した。本稿では、小規模校に所属する 38 名、中規模校に所属する 63 名、大規模校に所属する 46 名のデータを用いて分析を行うこととする³⁾。

3. クラブ活動の指導の実態

本章では、クラブ活動の指導の実態について、学校規模に着目し検討を進めていく。具体的には、クラブ活動の年間授業時数やクラブの特質に関する認識、実施状況（実施計画を含む）、さらには成果の発表状況などについて、学校規模による違いがみられるのかを検討していきたい。

まずは、現在の年間授業時数について検討していきたい。図1は、「クラブ活動は、年間何回（年間授業時数）実施されていますか？」という項目について、回答者に実数で尋ね、カテゴリ化（5回以下、6～10回、11～15回、16回以上）した結果を学校規模別に示したものである。「6～10回」の割合は、小規模校で76.3%、中規模校で65.1%、大規模校で76.1%となっており、いずれの学校規模でも「6～10回」の割合が大半を占めていることがわかる。また、「6～10回」の割合と「11～15回」の割合を合わせると、小規模校で89.5%、中規模校で82.6%、大規模校で95.7%となっていることもわかる。中規模校の割合が、小規模校や大規模校の割合よりも低くなっていることには留意しておく必要があるが、学校規模による違いはそれほど大きくないことが読み取れる。

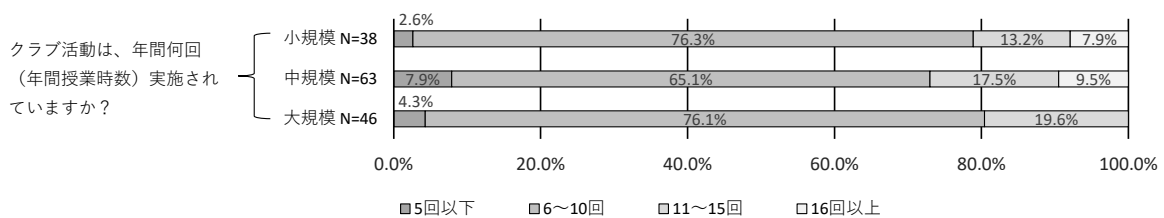


図1 現在の年間授業時数（学校規模別）

クラブ活動は、「児童が好きなことや興味のあることを念頭に計画を立て、異学年の児童とも協力し楽しみながら行う」という特質をふまえて実施されるべきものであるが、学校規模によって、実施状況に違いがあることも想定できよう。以下では、クラブの特質に関する認識について、学校規模による違いがみられるのかを検討していきたい。

図2（上）は、「クラブ活動は、児童が「皆で考え、計画を立てる活動」となっていますか？」という項目について、回答者に選択肢（そう思う、ややそう思う、あまりそう思わない、そう思わない）を設け、尋ねた結果を学校規模別に示したものである。肯定的な回答（「そう思う」と「ややそう思う」を合わせた回答、以下同様）の割合が、小規模校で76.3%、中規模校で74.6%、大規模校で67.4%となっており、いずれの学校規模でも、「児童が皆で考え、計画を立てる」という特質をふまえた活動を概ね実施できていることがわかる。学校規模による違いに着目すると、大規模校は他の学校規模よりも、肯定的な回答の割合が低くなっていることもわかる。大規模校は、各クラブに所属する児童数も多くなることから、児童「全員」で話し合い、合意形成を図り、計画を立てるということまで行うのは難しいのかもしれない。そうした大規模校ならではの事情が、上記の結果に反映されているのではないだろうか。

図2（中）は、「クラブ活動は、「好きなことや興味のあることを楽しむ活動」となっていますか？」という項目について、回答者に選択肢（そう思う、ややそう思う、あまりそう思わない、そう思わない）を設け、尋ねた結果を学校規模別に示したものである。肯定的な回答の割合が、小規模校で86.9%、中規模校で93.6%、大規模校で84.7%となっており、いずれの学校規模でも、「児童が好きなことや興味のあることを楽しむ」という特質をふまえた活動を実施できていることがわかる。学校規模による違いに着目すると、小規模校や大規模校は中規模校よりも、肯定的な回答の割合が低くなっていることもわかる。小規模校は、教員数や児童数の関係でクラブの種類や数に制限があることなど、大規模校は、各クラブに所属する児童数が多く、各児童の要望を反映しにくいことなどの事情もあり、上記の特質をふまえた活動を実施するハードルが高いのかもしれない。

図2（下）は、「クラブ活動は、「異学年の児童と協力するような活動」となっていますか？」とい

う項目について、回答者に選択肢（そう思う、ややそう思う、あまりそう思わない、そう思わない）を設け、尋ねた結果を学校規模別に示したものである。肯定的な回答の割合が、小規模校で 92.1%、中規模校で 90.5%、大規模校で 82.6%となっており、いずれの学校規模でも、「異学年の児童と協力する」という特質をふまえた活動が実施できていることがわかる。学校規模による違いに着目すると、大規模校は他の学校規模よりも、肯定的な回答の割合が低くなることに加え、「そう思う」の割合も低いことがわかる（小規模校 44.7%、中規模校 38.1%、大規模校 23.9%）。大規模校は、各クラブに所属する同学年の児童が多くなってしまふ。そうした中では、結果的に異学年ではなく同学年の児童で活動を進めるといふ状況になってしまうのかもしれない。

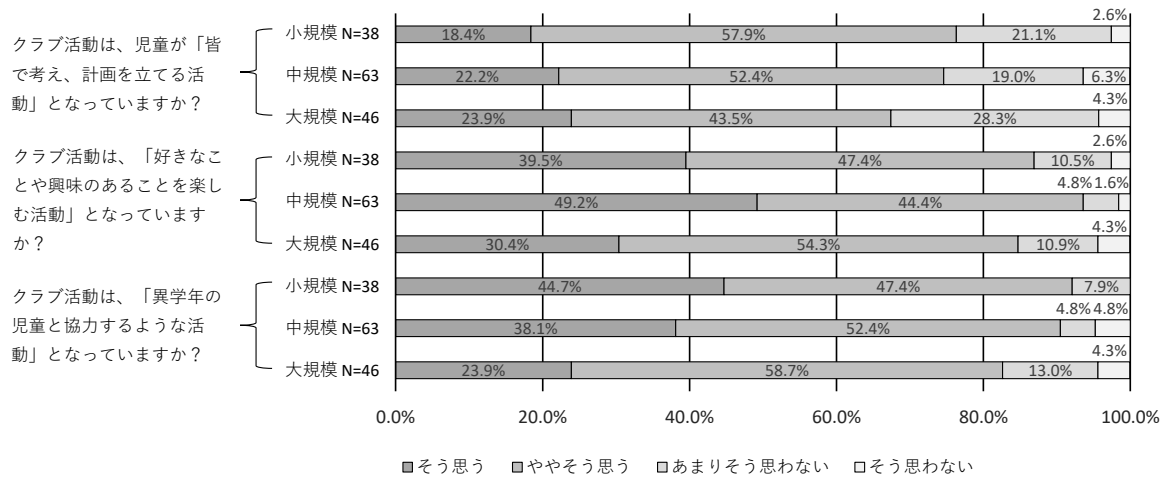


図2 クラブの特質に関する認識（学校規模別）

先述のように、クラブ活動は「児童が好きなことや興味のあることを楽しむ」という特質をふまえて実施されるべきものである。以下では、そうした特質をふまえた実施の成立を左右するであろう、新たなクラブを設置する仕組みや具体的な活動内容を知るための機会などについて、学校規模による違いがあるのかどうかをみていきたい。

図3は、「児童が新たなクラブの設置を提案することができる仕組みはありますか？」という項目について、回答者に選択肢（仕組みがある、仕組みはない）を設け、尋ねた結果を学校規模別に示したものである。「仕組みがある」の割合が、小規模校で 55.3%、中規模校で 66.7%、大規模校で 65.2%となっており、特に中規模校や大規模校では、児童が新たなクラブの設置を提案する仕組みを概ね導入していることがわかる。学校規模による違いに着目すると、小規模校は他の学校規模よりも、その割合が低くなっていることもわかる。小規模校は教員数が少ないことから、設置できるクラブの数に制限があるだろうし、児童数も少ないため、設置できるクラブの種類にも制限がある。そうした状況では、学校側も児童が新たなクラブの設置を提案する仕組みを導入したくてもできないのではないだろうか。上記の結果の背景には、こうした小規模校ならではの事情があると考えられる。

図4は、「クラブ活動の希望調査を行う前に、具体的な活動の紹介や見学は実施していますか？」という項目について、回答者に選択肢（実施している、実施していない）を設け、尋ねた結果を学校規模別に示したものである。「実施している」の割合が、小規模校で 84.2%、中規模校で 87.3%、大規模校で 91.3%となっており、いずれの学校規模でも、クラブ活動の具体的な活動紹介や見学を実施できていることがわかる。学校規模による違いに着目すると、小規模校と中規模校は大規模校よりも、「実施している」の割合が低いことがわかる。学校規模が小さくなるほど、クラブ活動に初めて参加する学年の児童が、すでに参加している学年の児童と日常的に交流する機会が多くあり、具体的な活動紹介や見学をせずとも、どのようなクラブがあるのか、どのような活動をしているのかを理解して

いる可能性が高い。それゆえ、具体的な活動紹介や見学を実施していない学校の割合が高まるのではないだろうか。

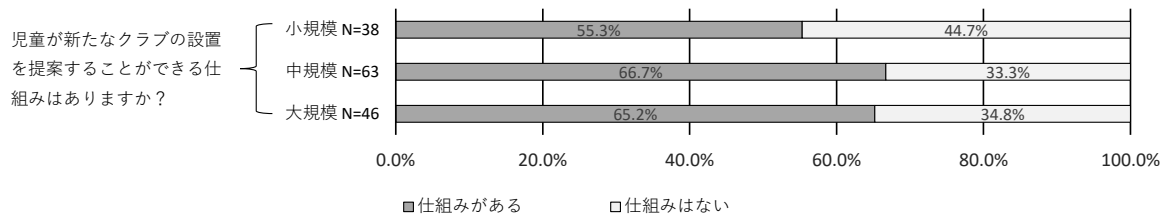


図3 設置を提案する仕組みの有無（学校規模別）

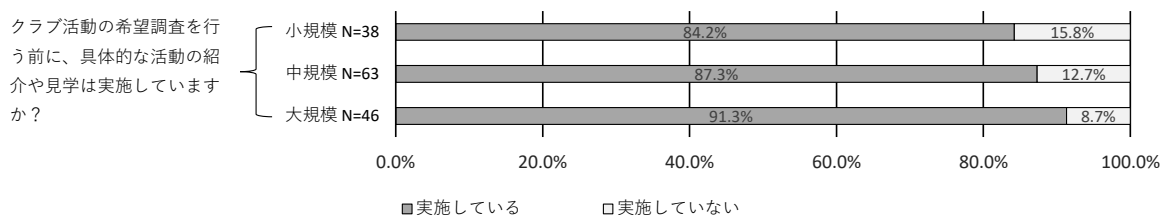


図4 紹介・見学の実施状況（学校規模別）

それでは、クラブ活動は実際どのように計画され、実施されているのであろうか。以下では、クラブ活動の実施状況について、学校規模による違いがみられるのかについての検討を行うこととしたい。

図5（上）は、「クラブ活動を行う上で、年度当初に「年間活動計画」を所属する児童で立てていますか？」という項目について、回答者に選択肢（立てている、立てていない）を設け、尋ねた結果を学校規模別に示したものである。「立てている」の割合が、小規模校で86.8%、中規模校で69.8%、大規模校で58.7%となっており、特に小規模校では、児童主体で年度当初に年間活動計画を立てた上で活動を進めることができていることがわかる。学校規模による違いに着目すると、学校規模が大きくなるほど、「立てている」の割合が低くなっていることもわかる。学校規模が大きくなるほど、各クラブに所属する児童数が多くなることから、児童間で話し合いを行い、合意形成を図っていくことは容易ではない。しかも年度当初の場合には、なおさら合意形成のハードルは高くなる可能性が高いだろう。このような背景が、上記の結果に関係している可能性がある。

図5（中）は、「毎回の活動の具体的な内容を、児童が話し合って決める時間を設けていますか？」という項目について、回答者に選択肢（毎回設けている、時々設けている、設けていない）を設け、尋ねた結果を学校規模別に示したものである。「毎回設けている」の割合が、小規模校で50.0%、中規模校で34.9%、大規模校で26.1%となっており、特に中規模校や大規模校では、毎回の活動の具体的な内容を、児童主体で決める時間を設けた上で活動を進めることが十分にできていないことがわかる。学校規模による違いに着目すると、学校規模が大きくなるほど、「毎回設けている」の割合が低くなっていることもわかる。検討の余地はあるが、やはりこうした結果にも、学校規模が大きくなるほど、児童間で合意形成を行うハードルが高くなる、という背景が関係しているのではないだろうか。

図5（下）は、「毎回の活動終わりに、振り返りの時間を設けていますか？」という項目について、回答者に選択肢（設けている、設けていない）を設け、尋ねた結果を学校規模別に示したものである。

「設けている」の割合が、小規模校で78.9%、中規模校で65.1%、大規模校で63.0%となっており、いずれの学校規模でも、毎回の活動終わりに、振り返りの時間を設けた上で活動を進めることが概ねできていることがわかる。学校規模による違いに着目すると、中規模校と大規模校は小規模校よりも、

「設けている」の割合が低くなっていることもわかる。例えば、大規模校では各クラブに所属する児童数が多く、児童一人ひとりに目が行き届きにくいいため、活動の目標を個別に設定させ、振り返りまで行うことは難しいのかもしれない。やはり、こうした大規模校ならではの事情が、上記の結果に係している可能性は十分あるだろう。

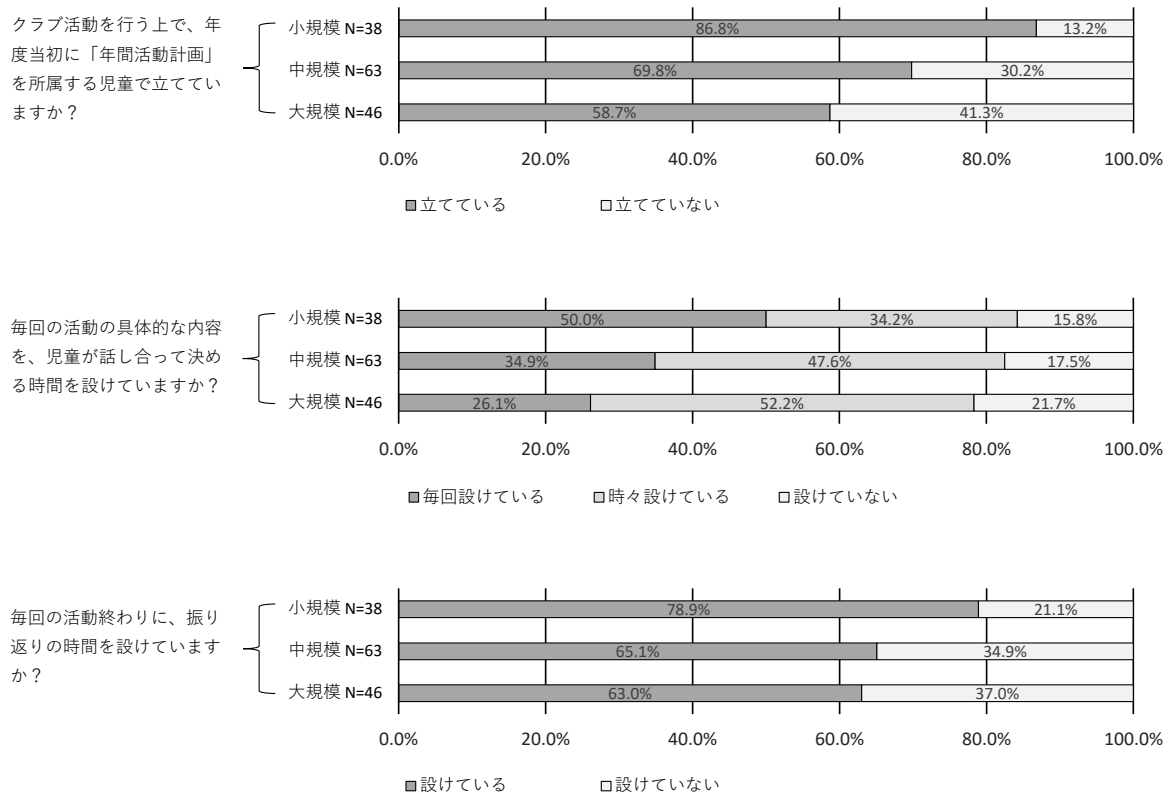


図5 クラブ活動の実施状況（学校規模別）

他の教育活動と同様、クラブ活動においても、児童が活動を振り返り、自らの成長を実感することができるような機会を設けることは重要である。とりわけ、活動に取り組んだ成果を発表するという機会は、児童に自らの成長を実感させる契機になるものであり、重要であろう。以下では、クラブ活動の成果発表状況について、学校規模による違いがみられるのかを検討していきたい。

図6は、「クラブ活動の成果を発表する機会を学校として設けていますか？」という項目について、回答者に選択肢（設けている、設けていない）を設け、尋ねた結果を学校規模別に示したものである。「設けている」の割合が、小規模校で34.2%、中規模校で42.9%、大規模校で39.1%となっており、いずれの学校規模でも、クラブ活動の成果を発表する機会を設けることが十分にできていないことがわかる。学校規模による違いに着目すると、小規模校は他の学校規模よりも、「設けている」の割合が

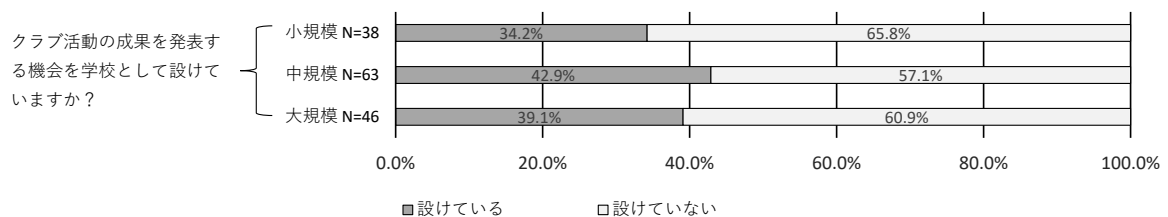


図6 成果の発表状況（学校規模別）

低くなっていることもわかる。先述のように、小規模校では、他の学校規模よりも、毎回の活動終わりに、振り返りの時間を設けた上で活動を進めている。そうした振り返りの時間を通して、児童自身に「学び」を整理させ、成長を実感させていることもあり、活動に取り組んだ成果を発表する機会までは設けていないのかもしれない。

周知のとおり、『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別活動編』（文部科学省 2018）では、「クラブ活動の学習過程」が例示されている⁴⁾。例示された学習過程と現在学校で行われている学習過程との間には、どの程度の乖離があるのだろうか。さらには、学校規模による違いがあるのだろうか。このことについて、最後に検討をしておきたい。

図 7 は、「（文部科学省が例示しているクラブ活動の学習過程と）現在学校で行われている学習過程とではどの程度乖離していますか？」という項目について、回答者に選択肢（乖離している、やや乖離している、あまり乖離していない、乖離していない）を設け、尋ねた結果を学校規模別に示したものである。乖離しているという回答（「乖離している」と「やや乖離している」を合わせた回答）の割合が、小規模校で 42.1%、中規模校で 31.7%、大規模校で 50.0%となっており、いずれの学校規模でも、文部科学省が例示している学習過程と現在学校で行われている学習過程との間に、一定程度乖離がみられることがわかる。学校規模による違いに着目すると、小規模校と大規模校は中規模校よりも、乖離しているという回答の割合が高いこともわかる。本稿の分析結果をふまえると、小規模校は、児童が新たなクラブを設置するための仕組みの導入や活動の成果を発表する機会などの点に、大規模校は、クラブの特質（「児童が皆で考え、計画を立てる」という特質、「異学年の児童と協力する」という特質）をふまえた活動の展開やクラブ活動の実施計画・実施状況、さらには活動の成果を発表する機会などの点に課題がある。こうした課題があるがゆえに、上記のように標準規模とされる中規模校よりも、乖離の程度が高いのではないだろうか。

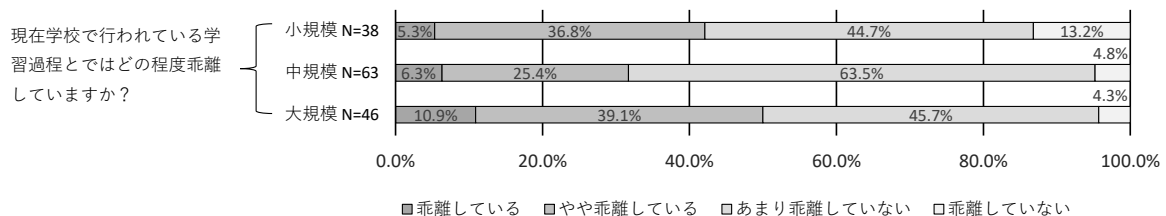


図 7 学習過程の乖離状況（学校規模別）

4. まとめと考察

本稿では、小学校教員を対象として実施したアンケート調査のデータをもとに、クラブ活動の指導の実態を学校規模という視点から検討を行った。分析から得られた主要な知見は、以下の五つである。

第一に、クラブ活動の特質という観点では、大規模校は他の学校規模よりも、クラブの特質のうち「児童が皆で考え、計画を立てる」という特質、「異学年の児童と協力する」という特質をふまえて活動を実施することができていないことが明らかになった。

第二に、新たなクラブの設置を提案する仕組みの導入状況、クラブの紹介・見学実施状況といった観点では、小規模校は他の学校規模よりも、児童が新たなクラブの設置を提案する仕組みを導入していないこと、クラブの具体的な活動紹介、見学を実施していないことが明らかになった。

第三に、クラブ活動の実施状況という観点では、学校規模が大きくなるほど、児童主体で年間活動計画を立てた上で活動を行ったり、毎回の活動の具体的な内容を児童主体で決める時間を設けた上で活動を行ったりすることができていないことが明らかになった。

第四に、クラブ活動の成果発表状況という観点では、小規模校は他の学校規模よりも、クラブ活動に取り組んだ成果を発表する機会を設けていないことが明らかになった。

第五に、学習過程の乖離状況という観点では、小規模校と大規模校は中規模校よりも、文部科学省が例示している学習過程と現在学校で行っている学習過程との乖離の程度が高い状況にあることが明らかになった。

以上のように、クラブ活動の指導の実態は学校規模によって変わり得るものである。それゆえ、指導のあり方を考えていく際には、学校規模ごとに、どのような点に課題があるのかを押さえておく必要がある。そのことをふまえて、本稿では標準規模とされる中規模校以外、すなわち、小規模校と大規模校それぞれの指導のあり方を考察することとした。

第二の知見、第四の知見からもわかるように、小規模校は、児童が新たなクラブの設置を提案する仕組み、クラブの具体的な活動紹介・見学、活動の成果を発表する機会という点に課題がある。特に、活動の成果を発表する機会については、小規模校の6割程度がそうした機会を設けることができておらず、大きな課題だといえる。活動の成果を発表する機会を設けることは、児童自身に「学び」を整理させ、自身の成長を実感させる上で重要なだけではない。クラブ活動がただ「楽しいだけの活動」にならないようにするためにも重要である。近年では、学校教育にICT機器の導入が進んでいるため、そうしたものを活用し、成果を発表する機会を設けていくという方法もあるだろう。いずれにしても、クラブ活動が「楽しみながら学ぶ」という活動になるよう、特に小規模校では活動の成果を発表する機会を設け、指導を行っていくことが重要だと考える。

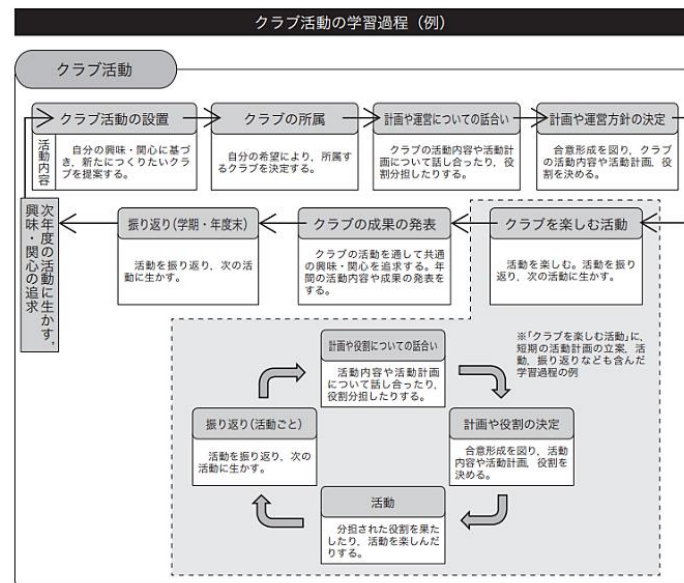
第一の知見、第三の知見からもわかるように、大規模校は、クラブの特質をふまえた活動の実施状況、クラブ活動の実施状況という点に課題がある。特に、クラブ活動の実施状況のうち、毎回の活動の具体的な内容を児童主体で決める時間を設けた上で活動を行うことができていないという点は、大きな課題だといえる。というのも、大規模校の4割程度がそうした時間を設けることができていない状況にあるからである。毎回の活動に対して、各児童が「見通し」を持ち、主体的に取り組むためにも、児童間でその時間の活動内容について話し合う時間は重要だろう。こうした話し合いの時間なしに活動に取り組ませたとしても、児童の学びは深まらないだろうし、活動自体が活性化することもないのではないだろうか。このように考えると、特に大規模校においては、児童間での合意形成に至らないまでも、毎回短時間でもそうした時間を設け、指導を行っていくことが重要だと考える。

なお、本稿では小学校教員を対象として実施したアンケート調査をもとに、クラブ活動の指導の実態を明らかにした上で、その指導のあり方を考えてきた。しかしながら、クラブ活動の指導のあり方を考えていく上で、児童が活動にどのように取り組んでいるのか、活動をどのように捉えているのかなど、児童の視点からの検討が必要不可欠だと考えられる。今後は、児童の視点から、クラブ活動の実態についての検討を進めるとともに、そうした検討によって得られた知見をふまえて、指導のあり方を考察することが求められる。

注

- 1) クラブ活動に関する先行研究としては、樽木ほか（2017）などが挙げられる。樽木ほか（2017）では、学習指導要領の変遷を押さえた上で、小学校教員がクラブ活動の今日的課題に対してどのように対応してきたのかが検討されている。しかしながら、こうした先行研究では、クラブ活動の指導の実態についての検討が十分に行われていない。もちろん、文部科学省（2023）の「令和4年度公立小・中学校等における教育課程の編成・実施状況調査」などにより、クラブ活動の年間授業時数の現状については把握することができるが、クラブ活動における指導の実態を十分に描き出すまでの知見が得られているとはいえない状況にある。
- 2) 勤務先の学級数（全学年の計）については、「特別支援学級」を除いた学級数となっている。
- 3) 本来であれば学校単位のデータをもとに結果の解釈を行う必要がある。本稿では便宜上、教員単位の回答を学校単位の回答とみなし、結果の解釈を行っていることを記しておきたい。
- 4) 参考図1は、『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編』（文部科学省 2018）において例示されている「クラブ活動の学習過程」である。特別活動の全体目標で掲げられている資

質・能力の育成を念頭に、クラブ活動において、どのような過程を通して学習を進めていくのかを示したものである。



参考図 1 文部科学省が例示した学習過程

出所：文部科学省（2018）の 104 頁より転載

参考文献

- 文部科学省, 2018, 『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別活動編』東洋館出版社。
- 文部科学省, 2023, 「令和 4 年度公立小・中学校等における教育課程の編成・実施状況調査〔調査結果〕」
https://www.mext.go.jp/content/20230419-mxt_kyoiku02_000029047_02.pdf（最終閲覧日：2024 年 10 月 6 日）。
- 樽木靖夫・木村昭雄・高田麻美, 2017, 「学校現場におけるクラブ活動および部活動の課題と対応」『千葉大学教育学部研究紀要』66（1）, 27-34 頁。
- 宇田響・実森有紀, 2024, 「小学校の「クラブ活動」における指導の実態」『くらしき作陽大学・作陽短期大学研究紀要』56（2）, 3-12 頁。

